白鷺とカッパ伝説 ── 下見

え 筑陽学園高校 月原由里子

▼数多くの歴史と伝説を秘めて 有明海にそそぐ宝満川（下見）

赤池の白鷺

江戸時代の御笠郡筑紫村下見（現筑紫野市大字下見）に赤池というところがあり、そこに仲のよい夫婦の白鷺がいました。

いつも一本足で立っている姿は美しく、まるで絵に描いたようで、村人達はこの白鷺を大切にしていました。

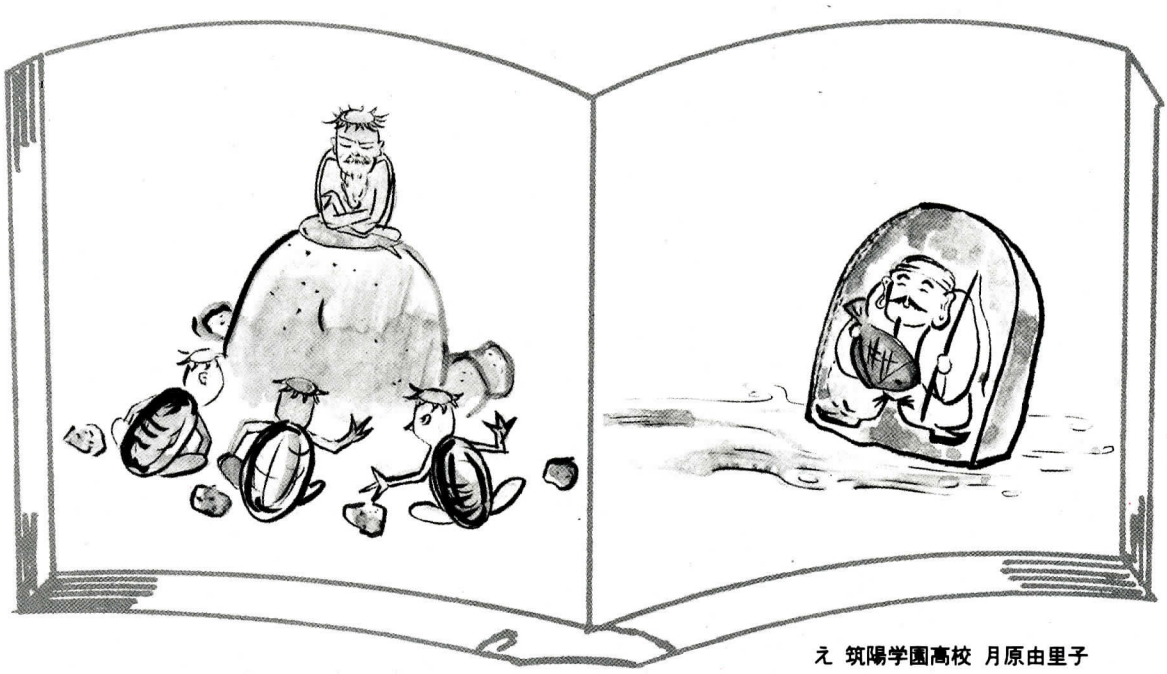
ある日のこと、子供達が池で釣ったフナを畦道に落としたまま帰りました。これを見ていた白鷺は、跳びはねて苦しんでいるフナを長いくちばしにくわえて、そっと池のなかに逃がしてやりました。その夜、明るい月の下で白鷺夫婦は、美しい夜をおくったことでしょう。

ところがつぎの日の夜、赤池近くの阿弥陀堂で村人が親しんだ智弁上人様の葬儀が行われました。えんえんと燃える火葬の煙りが、折りからの風にあおられ、赤池をすっぽり覆ってしまったのです。池で休んでいた白鷺は、あえない最後をとげました。

あの世からこれを見ておられた仏様は、かわいそうに思われ、この白鷺夫婦を人間に化身させ、再びこの世に送ってこられたのです。

これが美作領主の漆間時国夫婦というのです。しかし、夫婦は子供に恵まれず、勢至菩薩にお祈りを続けた結果、フナを救った善行のお返しに仏の世界から一人の男子がさずけられました。名を勢至丸といい、後に法然上人となられたのです。

文献でこの伝説を記載しているのは『筑前国続風土記附録』で「僅かに水溜れり。此所に白鷺棲めり。池の主也と里民いへり」とあります。法然は美作（現岡山県）出身とされており、なぜ下見と関係があるのかわかっていません。「赤池」という地名は今も残っています。



え 筑陽学園高校 月原由里子

庄兵衛が浦のカッパ

下見区を流れる宝満川のたもとに一本の椋の古木があり、その下に「水天宮」の石碑があります。そのそばに「庄兵衛が浦」と呼ばれる深い淵があり、そこだけは川水がよどんだ不気味な一帯でした。

毎年夏になると、この淵にカッパが現われ、女子供にいたずらをしたり、畑のきゅうりを荒らしました。困りきった村人は、「いたずらカッパをこらしめて…」と水神様に祈願をしました。

さっそく、水神様はカッパの頭目を呼び「なぜいたずらをする。二度とこの淵に来てはならん」と、きびしく言い渡しました。

頭目は手下のカッパを呼び集めて、水神様の言いつけを伝え、相談を重ねました。そして「今後、いたずらは一切しません」と村人へ証文をいれ、その後はカッパのいたずらはなくなりました。しかし、旧暦5月28日だけは「他所のカッパが客として来て、いたずらされてはかなわん」と、村人たちはこの日は水に入らない習慣ができたといわれています。それから後、再び大洪水のため水神様は流されて、その流れついたところが、今の久留米市の水天宮と伝えられています。

えびす様

明治33年7月のことです。前日からの大雨で宝満川のほとりに立つ椋の大木のところに古い木製のえびす像が流れつきました。木の枝に引っ掛かった木像を見つけた若い村人がここに祭ってくれという神様のお告げに違いないと拾いあげ、椋の木の近くに祭りました。

それから村人たちは、この大木を神木として毎年7月19日、夏祭りを催しています。この木製のえびす像は風雨にさらすと傷みが早いので、みかげ石に彫り込んでお祭りしており、ご神体は個人の家に保管して、祭りの日だけ拝観できるということです。

【参照】『下見史誌』『福岡の民話』
『筑前伝説集』

92. 3. 31. 発行
00. 3. 4,000 SYUEISYA